



TITLE:

2)「研究開発コロキウム」報告〔要約版〕：〔グローバルCOE〕採択：関与の「質」、記述の「質」、理論の「質」を問う--事象のアクチュアリティに迫る質的研究を目指して--

AUTHOR(S):

勝浦, 眞仁; 岡田, 敬司; 山崎, 徳子; 藤井, 眞樹

CITATION:

勝浦, 眞仁 ...[et al]. 2)「研究開発コロキウム」報告〔要約版〕：〔グローバルCOE〕採択：関与の「質」、記述の「質」、理論の「質」を問う--事象のアクチュアリティに迫る質的研究を目指して--. 研究開発コロキウム: 平成20年度 成果報告書 (Colloquium for Educational Research and Development) 2009: 6-7

ISSUE DATE:

2009-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/143138>

RIGHT:

関与の「質」、記述の「質」、理論の「質」を問う
—事象のアクチュアリティに迫る質的研究を目指して—

What is the “quality” of participation, description and theory?
-qualitative research for actual phenomenon-

研究代表者 勝浦 眞仁 (D3) 教員 岡田 敬司
研究分担者 山崎 徳子 (D3) 藤井 真樹 (D1)

〔研究目的〕

保育・教育といった人が生きている現場では、多様な人間関係が営まれている。その複雑な関係性の生きた意味をとらえるために、「生き生きとした関係」を厚く記述する質的方法の重要性が言われ、多様な形の質的研究が盛んに行われるようになってきた。

この趨勢の中、私たちのチームは生涯発達全体の関係発達を包括的に捉える観点から、それぞれの現場で質的研究に取り組み、人の生きる場の「あるがまま」をとらえ、記述し、理論化する方法を探ってきた。今年度は「身体」「主観と客観」「関係性」をキーワードに関与・記述・理論それぞれの「質」をどうとらえるか、という問いに取り組んだ。

発達心理学のみならず、教育学・社会学・心理臨床といった、さまざまな観点から事象のアクチュアリティに迫る質的研究の方法を構築していくことが本研究の目的である。そこで本稿では3人のメンバーのフィールドワークを通して、関与・記述・理論の「質」について議論を行った。

〔研究経過〕

授業は隔週金曜日の4, 5限にゼミ形式で行われ、博士課程に在籍する発達心理学および教育学を理論的背景にもつ、4名の参加者がほぼ2回ずつ事例を発表および文献購読を行い、発表者の関心にそって、方法論に関する討議を行った。

また今年度は学会発表にも取り組み、北海道大学で行われた第70回日本心理学会および筑波大学で行われた第5回日本質的心理学会においてポスター発表や自主シンポジウムにて口頭発表を行った。理論的な背景の異なる各分野の諸氏と多角的な視点から方法論についての議論を行ってきた。

以下、各メンバーの研究経過について紹介する。

人間・環境学研究科 D1 藤井真樹は、保育現場での関与観察を通して、自らの存在の現れについて考えることを迫られた印象的なエピソードを取り上げた。それを通して、関与観察者も「育てる」営みから無縁であることは免れず、「なじんだ他処者」なりの存在意義が生じてくるのがむしろ必然であり、こうした関与の「質」によって初めて、研究者は生きた現場に有機的に参入することが可能となることを示した。

人間・環境学研究科 D3 山崎徳子は、障碍児学童保育の指導員として企画・運営にあたりながら、実践の記録を記述し、その場面について母親と対話することを通して自閉症児の関係発達の様相を表そうとしている。発達障碍児の母親は障碍の克服というニーズを持つという、私たちが日常生活において当然だとみなしている価値観をいったん保留することで、生活の中でのその体験の意味を改めて問い直すことになった母親との対話について考察を行った。

人間・環境学研究科 D3 勝浦真仁は、自閉症を抱える子どもたちやその子の親、教師と関わっている。その実践の有り様をどのように記述していけばよいのか、フィールドで質的研究を志している研究者にとって関心の高い課題に取り組んだ。その課題に応える1つの方法である「エピソード記述」について、背景や関係性のみならず、研究者の身体に感じられた心の動き、**vitality affect** も合わせて記述することは、読み手に事象を了解しうる「エピソード」を記述するために不可欠であることを示した。

〔研究成果〕

関与・記述・理論の「質」を問い直すことによって、「関係性」「身体」「主観と客観」の観点から、事象のアクチュアリティに迫る質的研究を行うためには、次の3点が不可欠であることが指摘できた。

- ① 研究協力者と生きた自他関係を築きうる関与観察の質によってこそ、研究協力者という一個の主体に対する理解が深まり、アクチュアリティに迫る質的研究となる。
- ② 事象の意味に迫る研究を志向すれば、背景や関係性のみならず、その場の雰囲気、F先生の表情、語感、言葉の強弱など筆者の身体に感じられた動き、つまり **vitality affect** も合わせて「厚く」記述することで読者の了解を得られる。
- ③ 私たちが日常生活において当然だとみなしている価値観をいったん保留し、生活の中でのその体験の意味を改めて問い直すことは、自分とはちがうと思われる他者を深く了解し直す作業となり、「共に生きる」ことにつながる方法となる。

この3つの観点から、保育・教育現場での実践に有用なアプローチを提供することができた。この成果をもとに、今後ともアクチュアリティに迫る質的研究を目指し、方法にこだわり、発展させていきたい。